

PD-75.**創外固定器を併用して治療した下顎粉碎骨折の1例**

(八王子・形成外科)

○峯村 徳哉、川口 敦子、松岡 保子
吉澤 直樹、菅又 章

下顎骨骨折の治療は内固定による観血的整復固定術と顎間固定が一般的であるが、粉碎骨折においてはこれらのみでは治療に難渋することも少なくない。これは粉碎された骨片同士をたがいにつなぎあわせるのみでは良好な下顎のアーチを再現することが困難であることや、歯根の損傷を避けるべく、固定部位が制限されることも一因である。今回我々は下顎粉碎骨折の観血的整復固定をチタンプレートによる内固定と創外固定器の併用で施行し、良好な結果を得たので報告する。

症例は33歳男性、作業中に回転するプロペラ状の機械が下顎に当たり受傷し、救急車で搬送された。初診時、下顎頤部に約3cmの骨まで達する、口腔内の広汎な挫創、舌根部の浮腫が認められた。レントゲン、CTから骨折は右下顎角部から左体部にかけての大小5つの骨片をみる粉碎骨折であった。気道閉塞が危惧されたため、全身麻酔下に気管内挿管による気道確保と可及的徒手整復を行い、第7病日に観血的整復術を行った。角部のプレート固定と、大骨片の創外固定によりアライメントを再現し、術後は顎間固定を併用して6週間固定した。術後は良好で、4ヶ月経過し、開口、咬合とも違和感なく行えている。下顎粉碎骨折では骨片の内固定が不適当と思われる症例に対して創外固定は有用と考えられた。

PE-76.**地域医療機関は東京医大病院をどの様に見ているか—アンケート結果の解析—**

(医療連携室)

○金澤 眞雄、生沢富士子、松本 弘幸
平野 雅子

東京医大病院医療連携室では、平成11年に医療連携室を開設して以来紹介患者の増加を目指すべく、地域の医療機関との連携強化に努めてきた。診療報酬上

の紹介率は、年々向上し平成15年度には44.0%となっている。今回は地域医療機関が東京医大病院をどの様に見ているか調査を行なった。

【方法】平成17年2月に東京医大病院に紹介患者の多い新宿、中野、杉並、渋谷、世田谷、練馬の6区の医療機関に無記名のアンケートを送付した。対象とした医療機関は平成15年度に東京医大病院への紹介患者が3名以上ある施設とし、多くの診療科を持つ病院にも1通のみ送付した。

【結果】送付アンケートの合計は960通であり、回収は563通、回収率は58.6%であった。施設の内訳は診療所528通、200床未満の病院23通、200床以上の病院9通であった。東京医大病院への紹介患者数(人/年)は0~3人34通、4~9人245通、10~30人215通、31人以上65通であった。

紹介もとの先生の認識している患者様の東京医大病院の評価は満足32.9%、やや満足34.8%、どちらともいえない23.4%、やや不満5.0%、不満1.6%であった。紹介先の先生の東京医大病院の評価は満足36.9%、やや満足40.0%、どちらともいえない13.1%、やや不満6.0%、不満1.4%であり、医師の評価のほうがやや良い成績であった。

以後は複数回答であるが、紹介先を選択するとき重視する事柄は報告書がきちんと届けられる67.5%、医療レベルに信頼がある67.3%、患者様のお住まいに近い61.3%の順であり、東京医大病院の問題点として挙げられた項目は待ち時間が長い32.1%、患者様に東京医大病院への不満を言われた27.5%、患者様の報告書が届かない26.1%の順であった。今後サブ解析を行ない本アンケートの結果を東京医大病院の満足度向上に役立てたい。

PE-77.**病院全体のシステムとしての院内救急対応**

(救急医学)

○関 知子、河井健太郎、太田 祥一
本間 宙、神山 知子、三島 史朗
藤川 正、行岡 哲男

(救命救急センター病棟)

川原千香子

【はじめに】院内ホットラインは、ACLS コールと呼ばれ、平成13年4月より院内で発生した心肺停止症